

「春 愁」

七国峠へのハイキングから世田谷・上野毛の家に帰った喜八は、八木重吉の詩碑に思いがけず巡り会った感動がさめやらぬ間に詩作にとりかかり、「春愁」が生まれた。

第一部と第三部は 67 歳（河童では I 氏、S 氏・・・）になってこの詩を書いている喜八の現在の状況や心境の説明である。

これに対して真ん中の第二部は喜八の沈黙の自省。

春愁が生まれる大きな存在「八木重吉」について

明治 31 年生。敬虔なキリスト教信者。 29 歳、結核で昭和 2 年 3 月死去。

その詩は、重吉の穏和な人格を反映して、そのほとんどが短く、ひっそりとした言葉で綴られている。

「雨」

八木重吉 作

雨のおとがきこえる

雨がふっていたのだ

あのおどのようにそっと世のためにはたらいていよう

雨があがるようにしずかにしんでゆこう

重吉に対して尾崎喜八は明治 25 年生。（重吉より 5 歳年上）昭和 49 年 2 月、82 歳没。

二人の間には交友関係はなかったが、草野心平や高村光太郎を通じての繋がりがあり、喜八は当然詩人としての重吉を知っていた。

重吉の死後に出版された詩集「貧しき信徒」を読んだ喜八は、「故人の心そのもののような此等の詩に、涙と嘆賞とを同時にそそぐ。

「私は遂に八木君を此世で知らずにしまった事を今切に残念に思います。

私は八木君を生前に知っていた人々に対して、一つの羨望さえ持ちます。」

それにしても、あのとき自分の目の前の詩碑に刻まれていた重吉の詩、あんなに若くして死んでいった八木重吉の詩には、自分がやっといまたどり着いた「賢さ」や「澄み晴れた成熟」がみられるのではないか。重吉の詩境に三十年遅れていまやっと自分はたどり着いた。

本当に重吉の早世が惜しまれてならない。

静かに賢く老いるということは
満ちてくつろいだ願わしい境地だ、
今日しも春がはじまったという
木々の芽立ちと若草の岡のなぞえに
赤々と光りたゆたう夕日のように。

だが自分にもあった青春の
燃える愛や衝動や仕事への奮闘、
その得意と蹉跎の年々に
この賢さ、この澄み晴れた成熟の
ついに間に合わなかったことが悔やまれる。

ふたたび春のはじまる時、
もう梅の田舎の夕日の色や
暫しを照らす谷間の宵の明星に

遠く来た人生と、おのが青春を惜しむという
こと
これをしもまた一つの春愁というべきであろ
うか。

67歳になった自分は幸いにもやっと静か
に賢く老いることができた。
満ち足りてくつろいだ、願わしい境地だ。
あの日、大戸の村、重吉の生家のあたりで
見た風景。

春が始まったこの季節、木々の芽だちと若
草の萌え出た岡（自分より若い世代のこと
か）の斜面にあかあかと光たゆとう夕日
のような存在でありたい。

今日しも：「しも」は文語的な強調語

岡のなぞえに：「なぞえ」は斜面

たゆたう：ただよう

だが、自分にもあった情熱あふれる青春時
代、父親への反目、離反、結婚まで決意し
た年上の恋人との死別、文学によって生き
ていくための必死の奮闘…、

いまの幸せに至るまでには得意の絶頂もあ
るにはあったが、多くのつまずきや悔いが
あった。

いまやっと得られた賢さが間に合わなかつ
たことが悔やまれる。

やがて薄暗くなりかけたあたりにはどこから
か梅の香が漂ってきた。
谷間に宵の明星がしばし明るく輝いていた。

こうして遠くたどってきた自分の人生を顧み
る気持になったのも、いまさらそのようなこ
とが感じられるのは「春」という季節のせい
だろうか。